シリーズ 障害者の就労事例 22

夏井良光さん（岡山県A型事業所 ZENKO）

リーダーの星

KOTONONE Series of Stories vol.22

障害者が、自分たちでリーダーを選んだ

カーテンクリーニング工場で働くのは、ほとんどが障害者。そのリーダーも障害者。リーダーを選んだのも障害者。その仕組みも、障害者の希望だった。それでどうなったか。生産性が上がり、発注元からの信頼は高まった。岡山県岡山市のA型事業所「ZENKO」の一日を追った。

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

誰の指示でもなく、始業準備がはじまった

朝の八時。作業場では、四～五人が作業をしている。ある人は床の清掃、ある人は、クリーニングの機械を起動する準備を進めている。まだ始業時間前。誰に指示されるというのでなく、またチームを組むというのでもなく、自然に自分でやるべきことを見つけてやっている、という印象。

「ZENKO」は、NPO法人岡山南就業支援センター（市川善浩理事長）が運営する就労継続支援A型事業所だ。カーテンのメンテナンスリースシステムのメーカー「キングラン中四国株式会社」（以下キングラン）の全面的な支援を受けている。「キングラン」が病院や福祉施設などにリースしているカーテンのクリーニングが、主な仕事だ。ZENKOの大きな特色に、障害者が「リーダー」と「班長」を務めていることがある。

「リーダー」は、その日の業務の進行、成果すべてに責任を持つ役割だ。「班長」はリーダーの指示のもと、その日の運営を手伝う。現在のところ、リーダーは二人しかいない。今日のリーダーは、そのうちの一人、夏井良光さんだ。西日本を中心にさまざまなA型事業所の立ち上げに尽力した、特定非営利活動法人就労継続支援A型事業所協議会理事長・萩原義文さんは「障害者が自ら働く組織であることが、A型の意味なのではないでしょうか」と言う。リーダーも、班長も、どうしたら「障害者が自ら働く」環境になるかを、ZENKOの副理事長も務める萩原さんたちが考え続けた結果、生まれた取り組みだ。

八時一五分になった。「体操をしましょう！」。夏井さんが、大きな声をかける。みんな外に出て、ラジオ体操をする。少し遅れて体操に参加する人もいて、体操をしている間に、その日のメンバーが揃う。八時二〇分になると、みんなで事務所の神棚の前に行って、祝詞をあげ、そのあと朝礼だ。

仕事の進め方は、自分たちで考える

朝礼も、リーダーの夏井さんが仕切る。その日のメンバー全員に、午前と午後、それぞれの業務を伝える、「〇